

宮崎大学教育文化学部 主催

市民シンポジウム

～子どもの今と未来を考える～

## 第 2 回

# こどもとアート

〈講演要旨〉

平成 17 年 5 月 22 日(日)  
カリーノ宮崎 8 階 シアタールーム

宮崎大学教育文化学部 企画室

# 目次

〔講演要旨①〕 原田正俊 (都城市立美術館学芸員) . . . . . 2

〔講演要旨②〕 長友裕子 (ノイエ・アート・スペース主宰) . . . . . 6

〔講演要旨③〕 前田美保 (Mu工房ミュージカル主宰) . . . . . 10

〔講演要旨④〕 斉藤武 (宮崎大学教育文化学部) . . . . . 14

まとめにかえて 石川千佳子(宮崎大学教育文化学部) . . . . . 16

市民シンポジウム  
子どもの今と未来を考える

第2回は  
「子どもとアート」をテーマに、  
さまざまな場所で子どもたちと関わりながら  
創造的な実践活動を重ねておられる方々を  
お招きし、セッションを行うこと  
になりました。

近ごろ、子どもを取り巻く環境の  
著しい変化により、様々な  
社会問題が発生しています。  
このような問題を解決  
していくためには、  
地域の関係者・市民が  
一体となって有効な方法を  
探究することが大切であり、

「教育」と「文化」を冠する本学部には、  
そのイニシアティブを担うことが  
求められています。そうした  
取り組みの出発点として、  
地域に根ざした教育・研究  
の推進を図ることを目的に、  
本シンポジウムが企画されました。

第2回 子どもとアート

**【講演要旨①】**

**原田 正俊(都城市立美術館学芸員)**

都城市立美術館の「子どもとアート」に関する取り組みについて

■移動美術館

1992年(平成4年)2月7日 10:00～15:00 都城市立西岳中学校ランチルーム



1993年(平成5年)2月9日 10:00～15:00 都城市立夏尾中学校多目的ルーム



1994年(平成6年)2月10日 10:00～15:00 都城市立志和池中学校多目的ホール

1994年(平成6年)12月13日 10:40～15:00 宮崎県立都城ろう学校講堂:律唱室

■特別企画展「ヴィーゲラン展」

1995年(平成7年) 屋外ワーク



ショップ彫刻



■増改築時

1997年(平成9年)11月2日～11月27日 都城市立明和小学校「ふれあい美術館」

1997年(平成9年)11月27日 都城市立祝吉小学校六年二組「鑑賞教室」

1998年(平成10年)1月13日～1月22日 都城市立祝吉小学校「祝吉ギャラリー」



1998年(平成10年)11月13日～12月9日都城市立明和小学校「ふれあい美術館」  
1998年(平成10年)11月16日～12月10日都城市立姫城中学校「学校巡回展」  
1998年(平成10年)11月16日～12月10日都城市立夏尾中学校「学校巡回展」  
1998年(平成10年)11月1日～11月8日都城中央地区アートフェスタ



1999年(平成11年)11月26日～12月13日都城市立明和小学校「ふれあい美術館」  
1999年(平成11年)11月26日～12月13日都城市立庄内小学校「学校巡回展」  
1999年(平成11年)11月26日～12月13日都城市立西小学校「学校巡回展」

■特別企画展「いわさきちひろ展」子どものための鑑賞教室

2000年(平成12年)10月7日竹迫裕子(ちひろ美術館学芸部長)



■生涯学習課 ハロー市役所元気講座「郷土の美術史と美術館」都城市立西中学校3年生

2003年(平成15年)9月12日 11:45～12:35

2003年(平成15年)9月17日 10:45～12:35

2003年(平成15年)9月19日 11:45～12:35

2003年(平成15年)9月19日 14:15～15:05

■志和池中学校美術科研究授業(光野浩一教諭) 電話対応

■特別企画展「モンゴル近代絵画展」

2002年(平成14年)ゲルの製作・モンゴル衣装の試着体験

## 子どもを取り巻く環境の変化

子どもを取り巻く環境の変化には、目覚ましいものがあります。特にテレビをはじめ、視覚聴覚に訴えるモニターの世界は、私たちにバーチャルな体験を与えるユニークで興味深い刺激的なものであふれています。近所の小川でドジョウをすくったり、土手でツクシを取ったりすることは、都会では、宮崎駿のアニメの世界でしょうか。幸いここ宮崎は、まだまだ自然が残され、身近なところで、その体験ができるのです。これからの季節、冷たかった川の水温が快くなっていくのを体験できるのは、現代では贅沢なことかもしれません。

## 制作活動の中で培われる能力

過密化する学校の教育課程や塾通いの中、上記のような実体験は、年ごとに少なくなっているのは明らかです。しかし、美術では、粘土をさわってその温度を実感できます。夏ならひんやりと気持ちの良い冷たさを、冬には、コネながらだんだん手のぬくもりが伝わる感触を味わえます。人の手のぬくもりが伝わった粘土で培われた感覚では、人間の温もりの感じ方も違うでしょう。さらに命の尊さも違うのではないのでしょうか。ペンや筆を使う絵画では、思うように描けるようになるにつれて色々な人の絵の良さが判るようになります。そして色々な絵の中から良さを見つけられるようになります。下手な絵をけなすことは簡単ですが、その同じ絵から良さを引き出せるようになるには能力が必要です。

## 現代社会の中での重要性

人間関係でも同じ事が言えるのではないのでしょうか。人の悪い面ばかり口にする人とは、あまりお友達になりたくありません。友達になりたい人は、人の良さを引き出してくれる人です。アートによって、冷静な観察力や多様な視点、価値観が備わってくるのではないかと期待します。しかし、こういう能力は、覚えて備わるものではありません。受験勉強のような記憶力教育では、なかなか身につかないものがアートの分野にあるのではないのでしょうか。今までにない色や形を創造した時の感動は、体験して初めて自分のものになります。また、正確なデッサン力は、いかに人間の見る力が観念的であるかを知るには、好都合です。

そのような、感動や見る力を学べる鑑賞が、学校の美術で付け足しのような扱いを受けてきました。しかし、現代社会の複雑な人間関係や多様な価値観に対応し、生き延びていくには、鑑賞は、重要な能力だと思います。

## 子どもの鑑賞と大人のサポート

もっとも自己表現でいっぱいといった子どもたちにとって、鑑賞はかなり高度な分野です。小学生からお年寄りまで、美術館を訪れる人たちの鑑賞の様子を見ているのですが、正直なところ、鑑賞は子どもにとってやはり難しいようです。学校団体でも小学校中学年以下だと引率の先生も鑑賞マナーの指導で手一杯でしょう。「さわるな」「走るな」「騒ぐな」の3点をしっかりと押さえておかないと、体育館状態になってしまいます。もっとも中学生だからといって熱心に鑑賞しているかといえば、そうではなく、展示室を最短距離の直線で通過し、クラスの最後の人が入る前に出口から出てきていたりもします。興味がわからないものを見なさいといわれても、長続きしないのは当たり前。強制されればされるほど、嫌いになるというのが本音でしょう。世の中には、額縁に収まった絵よりも魅力的で刺激的なものが山ほどあるのですから。

だからこそ、おとなのサポートが重要になると思います。制作することは、見る目を育てるいちばんの近道ですが、みんなが絵を描くことが得意ではないでしょう。絵を描かない人にとっても必要な、ものを見る力を、真実を見極める力を育てるために、少しずつ色々な視点を子どもに提供してあげたいと思います。描く力だけではなく、見る目が育てば、価値観に幅のあるところの広い人に育つでしょう。そして鑑賞によってアートが身近になれば、アートが他人事ではなく、大切な価値観のひとつである事に気付くでしょう。

## 〔講演要旨②〕

長友 裕子(ノイエ・アート・スペース主宰)

### 話の柱

- “アート”とは何か
- “アート”と“美術”と“芸術”
- アートから学ぶべきことは何か。
- 学校の「教科」の“美術”から“アート”に近づけるために。
- メビウスの卵展、宮崎での『来て見て触れる展覧会』から

### ●“アート”と“美術”と“芸術”

—「子どもとアート」と聞いた時、大抵の方はこの「アート」という言葉を少し非日常的なものとして捉えているのではないのでしょうか。正直言って「アート＝図画工作・美術」ではないと思っている方が多い。

—しかし、具体的に子どもたちの日常に一番近い「アート」というのは何かと考えると、一般的な家庭では、小・中高等学校で習う「図画工作・美術」でしょう。でも、イコールではない。なぜ、このようにずれるのでしょうか。

—“アート”と“美術(図画工作を含む)”と、さらに“芸術”とは、どのように違うのでしょうか。日本語だからこそその論議がかもしれませんが、その言葉が持つイメージは、実は思っている以上にあるようです。

—機会あるごとにその違いを尋ねてみると、「アート」は訳が分からないもの、難しいもの、よく分からないもの、新しいもの。“芸術”は古いもの、真面目なもの、上手なもの。“美術”は学校で習うもの。」と答える人が実に多い。また、子どもたちに至っても、ぐちゃぐちゃ描いてあったり、爆発したように描いてあったりすると～つまり衝動にまかせてぶちまけてあったりすると～『ゲージュツだ！』と言ったりします。子どもたちでさえ、微妙に学校の“美術”と“芸術”“アート”を分けて捉えています。

—では前述の分け方に則って考えた場合、学校で「美術」が「教科」のなかの1つとされている限り、「アート＝美術」にはなり得ないのかということです。

学校の教科になっている限り、「～ねばならないもの」になっている。提出しなければならないもの。描く気が起こらないけれど描けて言われるので、描かねばならないもの。今、作りたくないけれど作らねばならないもの。「アート」または「芸術」とはもっと気ままに、湧き上がるものを表現するものであるはず。「ねばならないもの」ではない。

学校の決められた時間内に、モチベーションを突然高め、維持し集中し、時間がきたらさっと終われるなんて、並み大抵なことではありません。普通に考えたら無理な話です。パラドックスですね。だからこそ、学校では「美術」の時間に、「アート」を教えずに、技術や理論的なことをたくさん教えているわけですね。本来「アート」とは、描こう、作ろうというモチベーションがないと始まらないもので、上手く描くための技術が先行することはあり得ない。逆に、理論的なことは、モチベーションがなくても、習うことが出来ます。だから学校の教科に美術は入れるわけですね。

—そのように考えると感覚的に「美術」と「アート」を分けて考えているのは正しいわけで、逆にそうやって分けているからこそ、「アート」及び「芸術」の聖域が守られているというおかしなことになっているのが現実です。

—話はいきなり極論になりますが、今、小中高等学校の図画工作・美術の授業数が激減してい

ます。

細かく言うと、小学校はトータルで多少減っている。中学校は随分減っている、と聞いています。減無くすわけにはいかなくて、申し訳程度に残されている。それだったら、思い切って学校の授業から完全に分離させ、別枠で美術を考えたらいいと私は思っています。点数もつけない。そうすることによって、より美術の持つ意義がはっきりするはずです。

その上、指導するのは、学校内にいる美術教師ではなく、学校外にある「アーティスト集団」に属する美術家で、そこから学校に教えに行くという制度。

すると、学校での様々な事務や雑務・行事に追われることなく、きちんとアートの分野だけと向きあえるようになるはずです。学校の雑務は、芸術的センスを無にするためにあるようなものです。

そのくらい学校の教科から別個に考えるべきものが実は美術教育だと思います。

ただ、嬉しい話もあって、学校の先生の意識改革が進んでいるということで、今まではどうしても4ツ切り画用紙に描く、の呪縛から離れられなかったところが崩れてきたそうです。

※「ふるさと先生」が、今そのような試みをしているが、逆に教員からの要請が少ないのが非常に残念。

## ● アートから学ぶべきことは何か。

—学校で出来ないアートなこと。

- ・ 学校内で行われている限り、時間が区切られカリキュラムが決まっているので、アートに大切な『じっくり時間をかけて』ということが非常に難しい。十分な時間がかけられない。一人一人向き合っ、作品について話し合ったりする時間が取りにくい。
- ・ 評価の難しい作品に点数をつけなければいけません。点数をつけない、ということが出来ない。それ恐ろしいことに、私も昨年とある高校で期末試験の絵の点数をつけました。その難しさを実感しました。人数の数だけある抽象画に、それぞれ点数をつけるようなものです。

—美術教育の意味(この場合は総合的に美術)

- ・ そもそも、なぜ、美術が学校で行われているのか。それは重要だからです。では、なぜ重要なのか。子どもたちが何を学ぶためにあるのか。あるいは子どもたちに教えるべきことがあるとすれば、美術というツールを使って何を教えるのか。教える立場の者が、根本的にその目的を明確に理解していないと、現在のようなおかしな美術教育がなされることになります。

—アートから学ぶものは何か。

- ・ 最も基本的なところに立ち返ってみると、私たちはアートから、何を学べるのでしょうか。個性の発見とか、自己表現の方法とかいろいろ言われていますが、自分の子ども時代、本当にそんなことを思いながら、絵を描いていたかどうか、物を作っていたかどうか、を考える必要があるでしょう。
- ・ 私は、アートから学べる大きなものは、「正直さ」だと思っています。自分の感じたことや考えたことを

正直に出すことを学べる、のがアートであり、美術だと思います。

- ・ 例えば、赤、青、黄色で6色の色相環を作るという作業をします。その際に、導入方法、どのような経過で何を発見し気付いてもらうのか、ということを考えます。

美しい色が並んだワッカを作り上げる事は2番目の目的です。1番の狙いは、色を混ぜていく途中に起こることを正直に体験することです。そこに『アート』意味があるのだと思います。ほんの少しの配合の違いで色が微妙に、または大変に違うことを体験すること、途中で予期せぬ色が出来た時、それを楽しむこと、などです。その中で、混色の面白さ、難しさを知るわけで、最終的に混色については体で覚えればよいわけです。

ここでもし、最終目的を6色の美しい色のワッカを作ること、という設定をすると、そこからは

み出た色、全然違う風に出来た色などは、恐ろしいことに「マチガイ」とされてしまいます。

- ・ これは実際にあったことですが、ニュートラルな緑色が作れない子が、緑のチューブから出して、黄色と青の中間に塗りました。きれいな色環を作り、出来上りを評価してもらうためです。間違っただけの色を作るのは嫌だし、無駄だとさえ感じてしまう。「きれいな出来上りを早く作るのが一番。」という思いだけで、絵の具を塗ってしまいました。
- ・ このようなことは結構起こり得ます。悲しいことに。美術でさえも、言い方は悪いですが、そうやって表面を取り繕うことをしてしまう子どもたちに、人生を正直に生きると言っても、それは難しい。一事が万事です。取り繕う人生はどっかで破綻してしまいます。

こんなことは、他の教科では決して学べないことではないでしょうか。緑色を塗ってしまう子は、大事なことを知らないだけです。このように、大事なことに気付くためのツールとしての「アート」が存在していることを、学校は忘れていたような気がするのです。

#### —学校で出来ること

- ・ 集団でしか出来ないことがあります。「ふるさと先生」でいろんな小・中学校に行きますが、クラス全体が良い雰囲気の時、子どもたちは大きな力を発揮します。少人数では出ないパワーが出る。そんな時、普段思いをなかなか出せなかった子どもが弾けたようになることがあります。
- ・ いつも属している社会で認められるのが何より力になります。担任の先生は勿論、他の先生の言葉。校長先生をはじめ、他の教科の先生方たちの言葉が強い自信になると思います。

#### —地域で出来ること。

- ・ アトリエに一旦入ったら、人によく見られたいとか、ほめられたいとか、そういう気持ちの外で制作できるように環境を作ってあげることです。集中する気持ちよさを実感することが大切です。
- ・ 何を出しても、その中に何かを見つけてもらえる、共感してもらえる、面白がってもらえる、自分の考えをきちんと聞いてもらえて、きちんと受け答えしてもらえる、という確実なものがあれば、子どもたちは実に正直に表現します。何のてらいもおごりもなく、一生懸命、面白いと思ったこと、興味深かったことを表現しつくそうと努力します。そして成し遂げた時の充足感を知れば、子どもたちはタフになります。
- ・ 学校では、子どもたち一人一人が集中する早さも、時間の長さもまちまちなので、アトリエのような密度の濃い時間を共有するのは難しいでしょう。少人数のアトリエの利点です。

#### —既成概念的見地からの評価。

- ・ 子どもたちは、もともと他人の評価を気にとめません。どうして気にし始めるか。それは教師や親が上手く描けた子の絵をほめたり、そういうのがいいという言い方をしたり、ああいう風に描け、と言ったりするからでしょう。それは、非常に些細なことで「やっぱりそういうのがいい」という言い方です。

「やっぱり」と言うのを耳にしたら、どんなふうなのが世界なのかと興味津々で見ている子どもたちに、あっという間に既成概念が出来てしまいます。

「やっぱり」的な絵からはみ出した子どもは、何だかとても大そうなことを仕出かしてしまったかのような後ろめたささえ感じてしまうでしょう。アートだからこそ、「やっぱり」なんてない、ということを教えるべき。

- ・ また、人と違う時間のかけ方をしても、「おそい」なんて口が裂けても言ってはならない言葉です。創造の世界に一般的な時間の概念を持ち込んで評価するのは、アートに対する冒涇です。

#### —学校の先生の影響

- ・ 出会った先生が、美術の持つ力を信じているかどうか、で子どもたちの運命は大きく変わります。
- ・ 指導だけするのではなく、ホンの 10 分でも子どもたちと一緒に筆を持ち、絵の具を混ぜ、あるいは紙を切り、粘土をこねて欲しいと思います。指導する気持ちが全く変わります。

- 学校の「教科」の“美術”から“アート”に近づけるために。
  - ・ 学校などの現場で、評価する注目点に十分注意して欲しい。
  - ・ 「美術」の目的の再認識。美術の持つ力を信じること。
  - ・ ささいな言葉ですが「やっぱり」という言葉を使って、子どもたちに既成概念を作らないようにしたい。
  - ・ 美術館の利用。もっと現代のものも展示するべき。
  - ・ おざなりにしないこと。身近な現象を大事にすること。時間をかけること。
  - ・ アートを消費しないこと。尊敬の気持ちを持って作品に接すること。
  - ・ 子どもたちにもっと本を読む機会を与えること。インターネットなどで多くのことがディスカロジャー（公開、暴露）されてきているし、科学の発展などにより、次々と解明されてくる。本を読ませてイメージ力を鍛えること。

■ 参加型展覧会「メビウスの卵展」、「来て見て触れる展覧会」

● メビウスの卵展

— メビウスの卵展の生まれた経緯

- ・ 五感を使う
- ・ 芸術と科学と福祉のリンク

— 展示内容

— 世界の動向 「エクسプラトリウム(サンフランシスコ)」

● 宮崎での初観客参加型展覧会

— 展示風景の紹介

— 感想、手ごたえ、波紋

## [講演要旨③]

### 前田 美保 (Mu 工房ミュージカル主宰)

平成 11 年 5 月より、宮崎市におきまして子供たちの劇団 Mu 工房ミュージカルを主宰しております、前田美保と申します。

Mu 工房ミュージカルは小学生から高校生までの子供たちによる、オリジナルミュージカルを公演する劇団です。現在 1 期生から 7 期生まで、36 名が在籍しており、毎週土曜日に練習をしています。

さて、最近子供たちの関わった犯罪が増加し、ある時は被害者、またある時は加害者となり悲しい事実を受け入れなければならない時代になりました。また日々の暮らしの中でも子供たちの心の育成について考えさせられることが多くなったように思えます。今、実際にその時代を生きている子供たちに、ミュージカルを通して悩みや悲しみ喜びの感情を伝えられたら・・・また、自分と言う一人の人間を大切にしつつ他への思いやりや感情の共有の大切さを伝えたい・・・という思いで、この Mu 工房ミュージカルを設立しようと考えました。

以下、写真・VTRを見ながら Mu 工房ミュージカルの活動概要を説明いたします

#### 1. 基礎練習(どこまで基礎力をつけることが出来るか自分との戦いです)

##### a. 発声練習 イントネーション矯正

元アナウンサーの先生はやさしく、時にはきびしく指導します。



##### b. 柔軟とバレエの基礎

基礎力に応じてテキストを進めていきます。基本ポジションの写真を掲載したテキストを作り、自宅でも練習できるようにしています。



##### c. ヴォイストレーニング

ミュージカルではソロで歌ったりコーラスしたりと多彩な歌唱表現が要求されます。音程やリズム、ハーモニーといった音楽の三要素を学びながら、表情豊かに楽しく歌うための表現力も身につけていきます。



## 2. 台本読み合わせ

「次回ミュージカルの台本を渡します。」と言うとみんなワ〜っと声を上げて喜んでくれます。この瞬間がたまらなくうれしくて、毎年台本や音楽を作り続けているのかもしれない。



## 3. 振り付け(歌に合わせて振り付け・インストに合わせて振り付け)

本科生が一番楽しみにしていることのひとつが振り付けです。

振り付けの先生は歌詞の意味や、シーンを考えて作ったダンスをテキパキと指導していきます。最近は基礎力が付いていないとうまく表現出来ないことをみんな理解出来るようになってきました。



## 4. 立ち稽古(セリフに振り付けをしています。衣装も少しずつ出来てきます)

初めは役になりきれず、少し照れたりする子供もいますが、いつの間にか自分の役に愛着が湧き、表現力もついていきます。

歌ったり踊ったり、セリフを言ったり忙しいミュージカルですが、音楽に合わせてタイミングよくセリフが言えるようになる頃には、みんなの顔に自信が溢れ、輝き始めます。

イントネーションや発声を正しく身につけながら、演技に磨きをかけていきますが、本番直前には、自分から演技についてのアイデアを出せるところまで成長する子供もいます。



5. 舞台リハーサル(音響照明のチェックをしながら動きの確認をします)  
音響照明が入り、それぞれマイクを付けた子供たちは本番に向け緊張し始めます。  
ドライアイスなども本番どおり使用して、特殊効果のリハーサルも行ないます。  
ここでは、舞台を影で支えてくれるスタッフがいて自分達のミュージカルが公演できることを  
知り、まわりの人たちに感謝の気持ちで接することを経験します。



本番

これまでの努力が報われる時です。

練習は楽しいことばかりではありません。うまくできず、泣いたことも、  
みんな出来ているのに…と悔しい思いをしたことも、練習中気持ちのすれ違いからケンカし  
たことも、全ての思いや経験が仲間みんな共通の『思い出と言う宝物』になる瞬間で  
す。



それでは昨年 12 月に公演しました「仮面の妖精」から、ほんの一部ですが、ご覧下  
さい。

- ①「仮面の妖精」は心を持たない冥界の王子ペルが豊かな感情を持った心を手に入れる  
ため妖精やミューズに出会いながら冒険するファンタジーミュージカルです。
- ②心を手に入れたペルは心を閉ざし「仮面」を被っている人間を助ける妖精になることを  
決心します。

舞台という場で自分自身と向き合い、存在を確認できる。そして、総合芸術と言われるミ  
ュージカルを通して何かを伝えられたら。それが私たちMu  
工房ミュージカルの目指す舞台です。



## 6. 新期生との交流

今年もまた新しいお友達が入ってきました。新期の始まりです。

1 ヶ月間の体験レッスンの後、正式にMu 工房ミュージカルのメンバーとして迎えられた新  
期生を歓迎するため、全員で遠足に出かけます。

学校も年齢も様々な子供たちが、共に助け合いながらまた新しい歴史の1ページを作っ  
ていきます。みんなの気持ちは新作のミュージカルへ一直線に向っています。



## 小講演まとめ

ミュージカルは子供からお年寄りの方まで楽しんでいただけるという親しみやすさと、その芸術性が近年多くの方に認知されるようになってきました。

ストーリーの中での様々な出来事に、初めは台本に書かれたセリフや歌をそのまま表現することで満足していた子供たちが、いつの間にか登場人物になりきって物語りの一部になっていく光景を目の当たりにした時、その集中力と想像力の豊かさに感動を覚えました。

公演を見て下さった方から「やっぱり、ミュージカルをしようと思う子供たちは初めから才能に溢れた特別な子供なのでしょうね。」とよく言われますが、劇団に入って半年間、みんなの前で声を出すのを恥ずかしがったり、体が硬くて産まれたての鹿のように踊っていたりと、どこでも良く見る光景が繰り返されています。みんな特別でみんな個性的で、でもどこにでもいるごく普通の子供達なのです。そんな子供たちが、ある子供は歌に、またある子供はダンスに自信をつけると、顔や立ち姿まで変化し、頼もしく誇らしく感じられ、それがうれしくて、ミュージカルをやって良かったと思えるのでしょう。

その方法はさまざまですが、スポーツであっても芸術であっても、目標に向かって、何かを創り上げていくことは、誰もが必要だと考えているのではないのでしょうか。

一人で黙々と自分の世界を創り上げていける人、誰かと協力して作りあげる人。

子供たちはそれぞれの個性にあった選択をして、それぞれの未来を創造していくのだと思います。そんな中でMu 工房ミュージカルを選び参加してくれた子供たちとそれを応援し、協力してくださるご家族にいつも感謝しています。

以前、ある講演で『教育とは教え育てることではなく、共に育つ共育であるのが望ましい』と、聞いたことがあります。Mu 工房ミュージカルでは、歌、演技、イントネーション、バレエダンスの振り付けなど、様々なジャンルの先生方に、子供たちの指導をお願いしています。その先生方が異口同音に言われるのが、この共に育つと言うことです。教えているつもりが教えられることがある…子供たちの創造力は、時として大人の予測を良い意味で大きく裏切り、その度に驚かされているのは事実です。

「僕はめでたく大人になったよ。だって、感動する心をどこかに忘れて来たからね。これからは花が美しいのは当たり前、毎日朝が来るのも当たり前。だから君とこれきり会えなくなっても泣いたりしない。だって別れは悲しいものだって解っているから・・・」これは私が子供の頃書いた短編の中で、主人公が大人の振りをして涙をこらえる場面でのセリフです。多分その頃の私は大人になると失う物が多くて怖いと思っていたのでしょう。

どこの国で育っても、どんな環境で生きていても平等に与えられるもの、それは年齢を重ねて行くことです。劇団の子供たちが大人になった時、今の思い出が宝物になっていくことを望みます。辛い時苦しい時の支えになってくれることを信じてこれからもミュージカルを子供たちと共に創造していきたいと思っています。

そして、ミュージカルを通して多くの方々とふれあい、郷土に根ざした活動を続けて行きたいと思っています。

〔講演要旨④〕

齊藤 武(宮崎大学教育文化学部)

宮崎県内の公共文化ホールの子どもを対象にした取り組みの紹介  
文化ホールにおけるアートマネジメントの取り組みの四つの分類より

1 鑑賞型(出会い型) appreciation

宮崎県立芸術劇場 宮崎国際音楽祭＝小・中学生のための音楽会  
カーネギーキッズ in みやざき

宮崎市民プラザ ザハールブロン音楽祭＝小・中学生のための音楽会

清武町文化会館 マスタークラス公開講座講師陣による子どものための音楽会

2 共演型(友情型) playing with

延岡総合文化センター 創作ミュージカル「ウズメ」

清武町文化会館 ミュージカル「モーツァルト」

ミュージカル「鏡の秘密」(宮崎大学制作)

市民文化ホール 音のスケッチブック野外コンサート 中・高校生の演奏

3 学習型(積極体験型) work-shop

宮崎県立芸術劇場 オルガンコンサート

高校生のための舞台裏方講座

門川町総合文化センター ギター教室

延岡総合文化センター 弦楽器講座

4 協働型(創造的実験型) collaboration

都城総合文化センター(来年度オープン) アジアの子ども音楽祭(予定)

4は各ホールともこれからの課題である。宮崎では音楽において創造的な取り組みを行っている子どもを対象とした団体は以下のようなものがある。

子どもミュージカル Mu 工房

宮崎ジュニアオーケストラ

宮崎少年少女合唱団

ハーバード・リードの芸術による教育より

…教育とは成長をうながすことである。＝身体的成長とは別に、心の成長は表現、聴覚的視覚的な記憶や象徴によって明らかとなる。

…教育とは表現の方式を養うこと。＝思考、論理、記憶、感受性、知性などあらゆる能力の育成の過程が芸術を含んでいる。

…教育の目的とは＝芸術家、科学者、すなわち様々な方式による表現に優れた人々を創造すること。

日本のこれからの音楽教育に必要なこと

- ・ 音の質の違いを聴き分ける能力の育成。
- ・ イメージ、想像力を沸き立たせる指導。

- ・ 体で感じる事、踊ることの重要性。

音楽的に旋律の美しさ、構成力をつかむ(私たちはその構造的な特質によって芸術に触れる□  
(K・カフカ)

子ども達が、近年建設された音楽ホール(新しく整った音響空間)で、直に生の音楽に触れたり、創造行為に関わることによって、ホールの現場から新しい文化が育っていく可能性を広げていくことが必要だと思われる。

## 第2回シンポジウム「子どもとアート」のまとめにかえて

石川千佳子(宮崎大学教育文化学部)

近年、知力ばかりでなく心の能力の育成が大切だといわれます。この場合、世相を反映して、徳育に重点を置くかたちで強調されることが多いようです。しかしながら、他者への思いやりのもとにある、感受性と想像力を育む教育は、美術や音楽、文学など芸術分野が長く担い続けてきました。同時にそのことは、芸術教育を感性の面にのみ限定してきた一面もあります。

今回のシンポジウムでは、美術や音楽という領域の垣根を越えるために、あえて芸術をアートと言い換え、すべての芸術の基本にある制作的な行為と、その成果に触れる鑑賞の体験が、子どもの人格形成の過程で、どのように重要な働きをなすかということについて考えようと思いました。もちろん制作・表現や鑑賞の際に大切なのは、感性ばかりではありません。むしろ、感性と知性と身体とが一体となって働く場であることが、アートの真骨頂といえるでしょう。

さて、さまざまな現場で実践を重ねておられる、4名のシンポジストの方々をお迎えしてお話を伺いましたが、初めに行われた小講演の詳しい内容については、講演者ご自身による要旨をお読みいただきたいと思います。

たいへん限られた時間でしたが、小講演後のディスカッションでは、芸術の良さは自分を正直に出せるところにあり、大人の側では既成の価値観や概念に囚われない態度や環境づくりが必要であるといった提言や、芸術活動を通して自分がここにいるのだという確かな実感をつかみ、自分の存在の貴重さに気づくことが大切だといった指摘をいただきました。また、鑑賞体験を深めるためにはアートが身近であるような環境が必要であり、制作の体験も重要だという視点や、地域の文化的環境について、たとえば音響の良いホールの存在によって、子どもの音を聞き分ける感覚が育ち、そこからアーティストとともにアーティストを育てる鑑賞者が生まれ、ひいては地域に根ざした文化が形成されるといった循環的な考え方も出されました。

続く会場との質疑のなかでは、芸術活動の評価や学校教育の現状と課題など、簡単には答えの出ない問題も俎上に上りました。

拙いコーディネーターでしたので、シンポジストの方々には語り残したことがおありでしょうし、参加いただいた皆様にもご不満な点が多々あるかもしれません。進行上の不手際については、改めてお詫びを申し上げます。

饗宴に源をもつシンポジウムの意義は、さまざまな意見が自由に交換されるところにあるといえましょう。この開かれたままの議論が、アートを通じた教育の潜在力について考える起点となることを願いつつ、簡単な報告を終わります。